

報告：林範親ゲストトーク

採録・編集：伊澤 文彦・齋藤 恵

日時：2024年9月8日(日) 14:00~14:30

場所：美術館2階常設展示室前ロビー

講師：林 範親 氏（造形作家）

司会：齋藤 恵（福島県立美術館主任学芸員）

齋藤：お集まりいただきまして、ありがとうございます。それでは林範親先生のゲストトークの方を始めさせていただきたいと思います。よろしくをお願いいたします。

まず、林先生をご紹介させていただきます。千葉県のお生まれで、現在は仙台市在住で、仙台市を中心に活動されております。日々の暮らしの中の風景ですとか、何気ない日常の記憶をテーマに、懐かしさを感じるような立体作品を、木材や木材の廃材を使って作られております。

当館に林先生の《路地裏》(図1~4)という作品を2006年度から収蔵させていただいており、ここに常設で展示させてもらいました。前を通りがかる時に気にしてくださる方もたくさんいらっしゃいます。どういった作品であるかとか、制作の経緯や意図等をお伺いできると楽しい時間になるんじゃないかと思い、この場を設けさせていただきました。

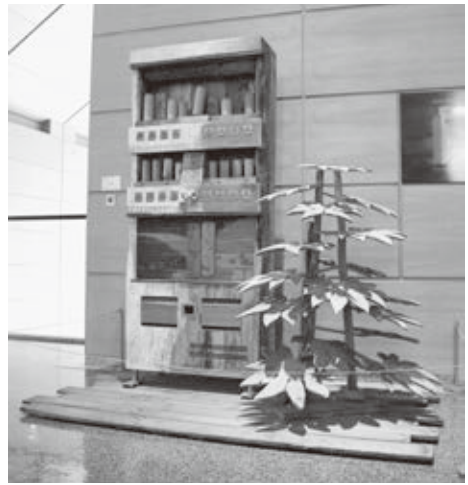


図1 《路地裏》と林氏

図2・3・4
《路地裏》1994年 ナラ、ヒバ、古材・アクリル絵具
197.5(H)×200.5(W)×111.5(D)cm
福島県立美術館所蔵

林先生の作品集ですとか、路地裏の資料なども机に置いてあります。過去のDMもぜひご自由に手に取っていただいて、作品を近くで見たりされながらお話をきいていただければと思います。それでは、林先生よろしく願いいたします。

林：ただいまご紹介にあずかりました、林範親と申します。どうぞよろしく願いいたします。

今日はお集まりいただいてありがとうございます。この《路地裏》という作品についてのゲストトークということでお話をさせていただくんですけれども、簡単に僕自身の経歴っていうか、いろいろやってきておりますので、その辺から入っていきこうかなと思います。

僕は、大学・大学院では、工芸科で漆の勉強をしていたんですけれども、漆にかぶれまして、漆（専攻）に籍は置いていたんですけれども、ほとんど木ばかりいじってました。ずっと木が好きだったのは今も変わらないんですけれども、なんとか大学院を修了いたしました。

それで、私事ですけれども、当時結婚しておりますので、すぐに作家になるのもいいけれども、一度就職してみたらどうかって研究室の大学院の先生に言われまして。

生活ってこともあるのかなということと、いきなり作家になるよりも、会社という社会に出て、勉強するのもいいのかなという思いで、現在のヤマハ、昔は日本楽器製造株式会社っていうピアノとかいろいろ作っている会社ですけれども、そこで家具部門を立ち上げるということで、そこに就職が決まりまして、5年間デザインの仕事をしました。

ピアノはほとんど木で作られているんですけど、木材の工業製品的な木の使い方と、工芸的な木の使い方と、いろいろな木の使い方があるんですけれども、そこで工業デザインとしての木材というようなものを経験させていただきました。

その後、デザインと木工、それから美術史を教えてくれる人を探しているということで、仙台の大学からお声がかかりまして。仙台に来て、四十何年になります。

7年前に大学の方はすっかり退職いたしました

て、現在はこういう作品作りをずっとしている、そんな状況です。

今回は午前中、ワークショップ(註1)がありまして、そこで埋もれ木(註2)っていう、仙台に埋もれ木細工というものがあるのですけれども、その埋もれ木を使った磨き体験を皆さんにさせていただきました。午前中に受講された方もここに何人かいらっしゃるかと思いますがけれども、その後ゲストトークということで、今やらせていただいております。

いろいろと資料を見ていただくとわかるのですけれども、日常の普段よく目にするようなものを立体化しようというようなことで作品を作り始めたのですけれども、彫刻の仕事は仙台に来てから始まりました。きっかけは、その大学の上司から、アートの世界も体験してみたらどうかということで、こういう作品を作るのが始まったわけです。

それで、作品を彫刻の公募展に出して、何度か入選しまして、なんとかアートの世界でやっていけそうな感じがつきましたので、それ以降ずっと作っております。《路地裏》の作品は東京でやった個展に出品した作品なんですけれども、その個展ではそれ以外に自動販売機の作品をいくつか出品しました。

当時、自動販売機は街中に溢れてまして、ゴミのポイ捨てとか、缶がその辺に散らばるとか、いろいろな問題が新聞などに取り上げられてきた自動販売機なんですけれども。

そんな自動販売機をモチーフとして作品にしたら面白そうだなと思っていざ作ろうとした時に、実際に自動販売機の寸法とかサイズとかそこに入っている商品の数であるとかどんな商品が入っているのかとかですね、作ろうと思うと、寸法がわからないと作れないんですよ。

それで、この自動販売機にしようと思った時に、写真を撮ったり実際に販売機のそばに行って寸法を測ったりとか、いろんなことを準備しないとならないんですよ。

例えば、こういうところ(《路地裏》の自販機のボタン部分)を作るにしても、ただ作るだけでは形にならないんですよ。実際何センチあるのか、それからどのぐらい曲がっているの

か、いろいろなことを実際に自分で測ってみたいとわからないところが多くて。図面を描くのは5年間のデザイナー生活である程度慣れていましたので、実寸を図って、それを図面化して、次は材料に何をを使うかということですね。主に金属でできている自動販売機なんですけれども、同じ金属で作るんじゃなくて、僕はずっと木を使ってきてましたので、木を使って作ったらどう見えるか、面白いのではないのかなどというようなことを考えておりました。それで、全て木で作るということになるんですけども。

全部木で作る作家は他にも何人もいるし、自分の特徴としての木は何なのかといった時に、古い材料をですね、古材といってもいろいろあるんですけども、当時、大学の校内で捨てられていたような梱包材であるとか、材木屋さんでも売り物にならないような雨ざらしになった木であるとか、そういう古い材料を使って何か作ってみようと思って作り始めたんですけども。木ってというのは生き物でして、ちょっと彫り込むとですね、元の姿の木が出てくるんですよ。その辺も面白いなと思ひまして、古い材料を使って全部彫り込むのではなくて、古さを少しずつ残しつつですね、作品にしていきました。

それで、今資料が回ってると思いますけれども、自動販売機はいろんな種類がありますから、できる限り写真を撮って、どれにするか、

どれが作品になるかというようなことを検討します（図5、6）。そこが一番苦勞するところですね。

自動販売機を作品にしようとした時に、やっぱりその生活感っていうか、人の暮らしっていうか、そういうようなものを作品としていつも感じられるような作り方をしているんですけども、その時に、どういうものがあるとそういう雰囲気が出るかなと考えます。

これはタイトル通り《路地裏》なんですけれども、東京の路地裏を歩いていた時に、よく家の前に植木鉢を置いてですね、植物を育てている風景があったんですけども、そこにちょうど自動販売機があって、（《路地裏》を指しながら）これヤツデの葉っぱなんですけれども、それが非常にこう、力強くて面白い組み合わせだなと思ったんですね。自動販売機とヤツデなどの植物（図7）を組み合わせると人の生活がちょっと垣間見えるのかなっていうようなことで、この作品に至ったわけです。

それ以外にも自動販売機はたくさん作りました。そばに電話機が置いてあったりとか、それから駐車場の自動販売機、そのそばに大きなくずかごもあって、そこに街灯があったり、ものそのものプラス人の生活感ですかね、そういう日常の生活を感じられるようなものを、作品として表現したいなということですね。

僕の作品に色がつくのはこの時期だけで珍しいんですけども、駅のコインロッカーとかキ



図5・6 林氏所有の資料写真より



図7 ヤツデの資料写真

オスクとか我々の日常生活でよく目にするものもいろいろ作ってきたわけですが。木でばかり作っていると、木の質感に頼りすぎんじゃないかなという感じを自分で持ちまして、木の質感を消すためにコインロッカーだけじゃなくて、自動販売機シリーズに関しては、自分でも大胆だなと思うぐらいの白だったり、青だったり赤だったり、そういう色を塗ってですね、今までの作品のように同じ素材を使うんですけども、色を塗る事で今までの作品と違う雰囲気を出したいなっていう感じもありました。

これ(《路地裏》)は白とブルーでポカリスエットの自動販売機ですよ。あとはココロラの自動販売機とか、いろいろあると思いますけれども、色によってその種類もわかるかなというようにことでも作っていたわけです。

本体は材料的に非常に重量感のあるナラの古材を手に入れまして、それで作っています。それと、あとスギであるとか、だいたい(自動販売機の)缶は、ヒバですかね。(ヤツデの葉の彫刻を見ながら)これはベイヒバかベイマツか木の質感や色が非常によくわかるものを使っています。

自販機のような日常、我々が目にするようなものが異質な素材で作られた時に、普段何気なく通り過ぎていたような風景でも作品を目にした人が、立ち止まって、ああこんな風景もあったなと自分の経験の中で思い出してもらえないかと思えます。

あと、技術的なことを言うと、あまり達者に作りすぎると、ものとしては、ちょっと味気なくなるっていうか、完成しすぎて、面白味もなくなってしまうのではないかと。この丸い缶もですね、全部カンナと小刀とノミを使って、ろくろとかそういうものを一切使わずに削り上げていく。近くで見てもらうと、その削り跡っていか彫り跡が見えるかと思うんですけども。もちろん、この葉っぱの方も彫刻刀とノミと、いろいろ使って作っています。

必ずしも磨き上げないで彫り残す。それで、どこまで彫り残すかっていうところが、いつも結構苦心しているところです。

(缶の)ブルーの線の部分であるとか、なん

となく雰囲気が分かれば、それでいいなっていうくらいに思って作っています。見る人が自分なりに完成形を作ってもらえればいいのかなというふうに考えています。

今日、実際の図面の資料を持ってきましたけれども、これを作り上げるためにターゲットを絞った自動販売機の実寸を全部測るんですね。図を描いて、それに全部寸法を入れていって、後で図面化をして、それで作り上げるという、そういうような作り方をしています。だいたい作るもの、人工物に対しては図面化をして作ります。いい加減な寸法でやっちゃうと、自動販売機にならないんですね。四角にならないし、隙間が出たりとかですね。不都合なところが出てくるので、図面化をして、その図面通りに遂行して、あとはどこに自分らしさを出せるかというところを考えながら作っている次第です(図8~11)。

(ヤツデの)葉っぱ、彫り残した部分はずいぶんあるんですけども、これが全部ツルっとしてくる感じになってしまうと、影みたいなものが消えてしまうので、そういうものを残しつつ、どこまで仕上げるかっていうポイントを気にしながら、作品は作っています。

今までやった展覧会の資料や、ポストカードも置いています。それから、インタビューの資料もありますので、どんな思いで作ってるかっていうのは、今の話にプラスしてこういうものを見ていただいて、理解していただければというふうに思います。

(資料を見ながら)最近、そうですね(モチーフとしては)植物が多いかなと思いますけど、これは今年の3月に仙台の画廊でやった展覧会(註3)なんですけども。

今まで自分で作るものは、自分の生活する日常生活の範囲内で目にするものを自分なりの視点で、ものをピックアップして作っています。僕の作品に人間は登場しないんですけども、人の気配を感じられるような作品にしたいな、とはいつも思っています。

それで、そういうふう感じてもらうにはどういう仕掛けが必要かという、例えばよく見るとここ(ヤツデの葉の下)に缶が何個か転



図8・9 林氏のスケッチより〈実測図〉

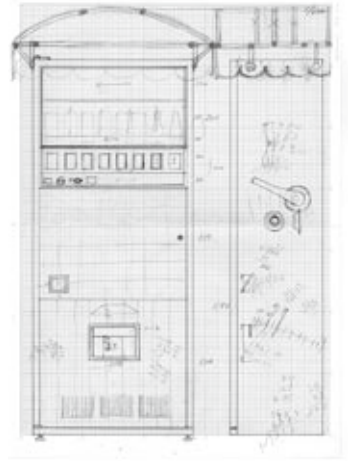
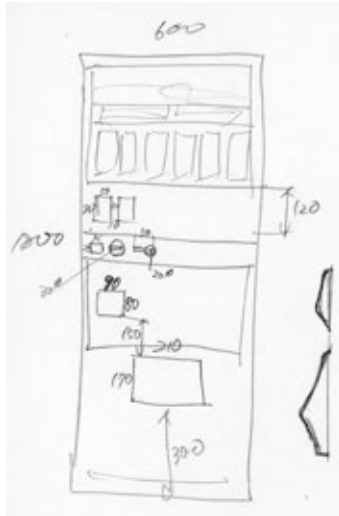


図10 《路地裏》とは別の自動販売機の図面

がってるんですね、木の下に。誰かが飲み捨てた缶があるんですけど、そういったようなところから、ああ、人が暮らしている街の風景なんだな、といったことは感じてもらえるんじゃないかなということ、自分なりに考えてやっています。

《路地裏》は、壁にピタッとつけるような形で考えてたもんですから、裏は作ってなかったんですけども。実際に自動販売機を見ると、ちゃんと裏もあるわけですし、裏まで作り込んだ時もありました。

あとはそうですね、《K・I・O・S・K 3・4番ホーム》(図12) っていう作品が、今まで自分が作った中で一番大きな作品になるかなと思ってますけれども、この《K・I・O・S・K》は構想から発表するのに、だいたい2年ぐらいかかったんですけども。

まず、取材っていうんですかね、写真を撮って、どういうふうな商品構成になっているのかとか、あと、どういうふうな人が利用しているのかとかですね。いろんなキヨスクを取材しました。

実際、キヨスクをその場で寸法を測るといったことができませんので、自分の体の寸法を覚えていって、キヨスクのそばに寄り、ここは腰までとか、キヨスクの図面は手に入らなかったものですから。やっぱり実測するっていうのは、ものを理解するために非常に有効な手段だと、



図11
《路地裏》の
ラフスケッチ

ものを作っていく時にそう思って作ってます。

普段飲んでる缶の直径が何センチだとか、高さが何センチだとか、メーカーによっても違いますし、ジュースやコーヒーの種類によっても違います。作る自販機のメーカーが決まると、それを購入して測るんですけども。

これは缶のシルエットだけで作ってるんですけども、形は正確に測って作っています。ですから、シルエットだけでもそれが何であるかわかるといいます。

実際に寸法を測らないと作れないんですよ。あそこのスリットがあって本当に立つのかっていうようなことも、全部細かくクリアして、図面化して作っています。



図12 《K・I・O・S・K 3・4番ホーム》
1996年 ペイヒバ・ペイマツ・古材、他
230(H)×300(W)×250(D)cm
今治市ところミュージアム大三島所蔵
撮影 内田芳孝
出典：図録『林範親一周縁の記憶―』
ギャラリーオカベ 1994年 5頁

こういう（ヤツデの葉の）植物みたいなのは多少の寸法が違ってても作れるのですけれども、こっち（自販機）になるとなかなかそうもいなくて、その辺が苦労したところでしょうね。

これを個展に初めて出品した時に他にもいくつかの自動販売機の作品がその会場に並んだんですけれども、（会場）写真はちょっと見ていただければと思いますけれども。

本当にいろんな自動販売機の種類があって、そうすると自動販売機の歴史みたいなのも調べたくなったり、自動販売機の社会性というか、そういうものもあるのかなと思って。まあ、普段何気なく使ってる自動販売機なんですけれども、作ってみて自動販売機への思いを新たにしたいといったようなところがありました。

何かご質問があればお受けします。

質問者1：今日は貴重な機会をいただきまして、ありがとうございました。

実は今日連れてきてない娘もすごい作品が好きで、見せてもらっているのですけれども、質問が二つありまして、娘が作品をすごく触りたがります。

それで、屋外の彫塑とかでも、やっぱり自分でも粘土をこねたりするのが好きなので触らせ

るし、父も触るのが好きなんですけれども、そういうのって作家の人にとってどうなのかなとか、手触りとか、私もヒバ材の木目であったりとか、やっぱり材木の違っていくのも面白いかなと思って見せてもらっていて、そのあたりどんな組み立てをされて作ることが多いのかなっていうのが一点。

二点目がですね、イメージが先か材料が先か。私も趣味でちょっと作るっていうくらいなので。構想力よりも材料を見てこんなのが面白いかなと思ってしまうことが多いんですけれども、そこをどうお考えなのか、今説明していただいたところと重なるんですけれども、教えていただければと思います。

林：はい。自分の作品は本当に触りたくなる作品が多くて。

面白い話がありますけど、自動販売機とかあと電話ボックスとかいろいろ作ってるんですけれども、展覧会が終わった後にですね、なんかカチャカチャするなんて思ったら、お金が作品に入ったりしてるんですよ。

ちゃんと（お金が）そこに落ちるように作ったりしてしまして。実際に触るっていうか、使ってみたくなるんでしょうけどね。

作家としては、もし触って壊れるようなことがあるとそれは困るかな。実際、展覧会会場でバケツの作品があって、バケツの取っ手も木で作ってました。それを小さなお子さんがバケツを持ち上げようとして壊してしまったり、やっぱりどうしてもそういうようなことがあったりとかすると、まあ本当は触ってほしい部分もあるんですけれども、壊れるとかそういうことがなければいいのかなというふうに思っはいます。

それから、イメージが先か材料が先かというお話ですけども、両方あるような気がしていて、何を作ろうかなと思った時に、その材料をどういう形でどういうふうを集めて作るかっていうこともあります。

ある時、大量に古材が入った時がありました。それをどう使いこなすかという時に、大きなものでないと消化しきれないなと思い、それで《K・I・O・S・K》を作ったっていうこ

ともありました。《K・I・O・S・K》を作り発表した時のお話ですけれども、東京で国際的な大きな展覧会があり、有楽町のアートフォーラムだったかな。そこで《K・I・O・S・K》が展示されて、その展示をした時には、もう行先は大体決まっていたらしいんですよ、画廊の人によると。そこに世界中の美術館の学芸員が来ていて、メトロポリタン美術館の学芸員が、これ欲しいっていうふうに言ってきたらしいんですよ。そしたら担当してた画廊の画廊主が僕の所へ来て「林君、もう一個作れないか」という話があったんですよ。

もう材料もないし、時間もかかるし、さっきも言いましたけど、2年ぐらいかかりますから、ちょっと無理ですねって話をして。

まあ、それはそれで話はなくなったんですけども、そういうことがあって、結局材料とイメージとどっちが先かという、いろいろ入り交じってきますね。

材料っていえば、始めにも言いましたがたまたま古材を使い始めたきっかけというのは、大学の構内にたくさん廃材があったんですよ。梱包の木枠とか、そういうのがたくさんあって。僕は大学に来るまで工芸家、またデザイナーとしての木の使い方を考えてきて、それはものすごいピカピカつるつるに磨いた非常に綺麗な高価な木なわけですよ。

その点、外に置いてある古材っていうのは全然違うんですよ。その古材を見た時に、これを僕の作品の特徴とすれば、アート作品としていけるのではないかと古材を利用して作るようになりました。

齋藤：その他、何かご質問のある方いらっしゃいますか？

質問者2：どれくらいの制作期間で作られるんですか？

林：そうですね、個展をやるために作った作品は、大体2年に一回くらいの割合で個展をしますので、1年半から2年くらいで全部作りましたね。

質問者2：並行して他の作品も一緒に制作されるんですか？

林：同時にやる場合もあるし、一個一個やる場

合もあります。

質問者3：ずっと前からこの作品（《路地裏》）を見ていた時に、一ヶ所すごく気になっていたところが、一番上の缶の真ん中が斜めになっているところで（図3）、すごく気になっていて。

私、世代的にこの自販機の形を知らなかったんで、この形そのものが造作だと思っていたら、先ほど写真を見て、本当にこういう形だったんだっていう驚きもあり、その斜めになってる缶も、先ほどのお話だと《路地裏》っていうタイトルもあるので、ちょっと田舎にある自販機で並びが崩れてしまったものなのか、どちらかというと、ピックアップ商品として、コーラ等が斜めに演出的に置かれている方を参考にされたのか、斜めになっている理由をお聞かせいただければ嬉しいです。

林：意図的に斜めのものを参考にしました。いろいろ見た時に、こういうふうの商品を展示しているものがありました。

全体のバランスを考えてちょっと崩そうかになっていうような意味もありました。

質問者4：缶の話聞いていて思い出したんですけど、頃合いって言うのはどう考えていらっしゃるのかなど。例えば、ポストの作品には「ポスト」という表示があって、ビジュアル的なものをきちっと表現されている。あとは今回の作品、この自販機だと、押すボタンの矢印なんかも表現されている。別の作品では、明治牛乳なんかも牛乳のつぶれた箱の感じがある。一方、この缶では、ポカリスエットの缶の青い部分がかろうじてヒントのようにチラッと表現されてますね。

例えば、缶なんかは本来表示があったものをあえて使わなかったんだと思いますが、元々のビジュアルをどこまで出していくのか、その辺のお考えをお聞きしたいです。

林：先ほど出た明治牛乳、あれは古い明治牛乳の箱をそのまま使ってます。

そういう場合もあれば、古い缶をそのまま中に取り込んだりとかもしています。この作品は、自販機って一個一個の商品っていうよりも全体的な雰囲気や缶っていうものを見てますので、ここであんまりビジュアルでやってしまうと、

そちらの方に目がいき自販機全体の雰囲気壊すような感じがしたもんですから、とりあえず雰囲気でなんとなくわかるかなっていうことで作りました。これ《路地裏》に関しては。

紫色の表紙の資料^(註4)を見てもらうと、自分がどういう思いで作品を作ってきたかがよりよくわかると思います。ぜひお持ちになって後で見ただければと思います。

齋藤：今日は林先生、お話をありがとうございました。

林：どうもありがとうございました。

(採録・編集：いさわ ふみひこ／学芸員
さいとう めぐみ／主任学芸員)

註

- (1) 同日の10時～12時に、大人から子どもまでを対象として「ピカピカ！埋もれ木体験」という創作プログラムを実施した。
- (2) 埋もれ木とは、500万年前の樹木が地中で長い時間をかけて炭化したもので、亜炭とも呼ばれる。仙台では燃料や工芸品の材料に利用されてきた。
- (3) 「記憶・風景 My Memory・My Scenery」SARP 2024年3月26日～4月7日。
- (4) 『学術の世界と市民をつなぐ情報誌「まなびのめ」』第14号 2011年 笹氣出版印刷株式会社

後記

2006年度に当館は林範親氏からの寄贈を受け、作品《路地裏》を収蔵した。現在、2階常設展示室前ロビーに展示している《路地裏》は、多くの鑑賞者に親しみを持って受け入れられている。

2024年9月8日に講師に林範親氏を招いて創作プログラム「ピカピカ！埋もれ木体験」を実施した。それに合わせて、当館収蔵作品である《路地裏》を中心に林氏の創作活動についてのトークイベントを開催したが、本稿はその報告である。

モチーフとなる自動販売機の実寸を計測し、木材本来の質感をバランスよく残しながら制作

する林氏の制作手法について、作品を目の前にしながら聞くことができる貴重な機会であり、非常に有意義なトークイベントであった。質疑応答においても、制作手法や素材についての話が多く、作品について更に関心を持ってもらえる機会になった。

作家による実体験をもとにした制作手法や制作目的の説明は充実したものであり、今後も定期的にゲストトークを行うことで作品についての理解を深めることが重要だと感じた。

最後に、本稿をまとめるにあたり、作家の林範親氏をはじめ、画像掲載にご協力いただきました今治市ところミュージアム大三島、内田芳孝氏（ノマディック工房）に心より御礼申し上げます。ここに記して謝意を表します。

報告：林範親ゲストトーク

採録・編集：伊澤 文彦（福島県立美術館学芸員）・齋藤 恵（福島県立美術館主任学芸員）

2024年9月8日(日)、講師に林範親氏を招いて創作プログラム「ピカピカ！埋もれ木体験」を実施した。それに合わせて、当館収蔵作品である《路地裏》を中心に林氏の創作活動についてのトークイベントを開催したが、本稿はその報告である。

まず、林氏による自己紹介のあと、2階常設展示室前ロビーにて展示中の《路地裏》の制作手法や制作目的についてお話しいただいた。林氏は、モチーフとして使用する自動販売機の写真を撮影し、実測して寸法を測るという準備の後に作品制作を開始している。自動販売機は素材としては金属で作られているが、林氏は木で作った際の見え方に関心を持ち、古材を使いながら、あまり彫り込まずに木本来の古さや質感を残しながら作品を創作してきた。

また、生活感を作品から感じられるようなものを作りたいという制作意図があり、そのために《路地裏》ではヤツデの葉を自動販売機と組み合わせて作品にしたことも語られた。

林氏には《路地裏》を起点としながらも過去の作品事例についても広範囲に自身の創作活動について語っていただいた。トークの最後には、質問者からの活発な質疑応答が行われた。

Report

Guest Talk by Hayashi Norichika

Compiled and edited by Isawa Fumihiko, Curator, Fukushima Prefectural Museum of Art, and Saito Megumi, Curator, Fukushima Prefectural Museum of Art

On Sunday, September 8, 2024, Fukushima Prefectural Museum of Art hosted a special program entitled *Pika-Pika! A Buried Wood Experience*, featuring artist Hayashi Norichika. In conjunction with this event, Mr. Hayashi gave a talk focusing on his artistic practice, with particular attention to his work *Back Alley*, housed in the museum's permanent collection. This report provides a summary of those proceedings.

After a brief self-introduction, Hayashi spoke about his purpose and methods in creating *Back Alley*, currently on display in the elevator lobby outside the second-floor galleries where the museum's permanent collection is housed. In describing his creative process, he recounted how he began by photographing and taking precise measurements of an actual vending machine to serve as his model for the work. In the process of replicating an object made of metal in a different medium, i.e. wood, his primary interest was in preserving the intrinsic look and feel of the reclaimed material that he used, with minimal carving or alteration.

Hayashi further explained that his artistic intent in creating *Back Alley* was to evoke a sense of everyday life, and, for that reason, he incorporated the leaves of the *yatsude* plant (*Fatsia japonica*) as a design motif.

Throughout the talk, Hayashi provided a broad perspective on his artistic practice, referencing many of his past works. The event concluded with a lively Q&A session.